

# 子どもの育ちへのNPOの貢献 － 地域子育て支援の事例から －

## The Contribution of Non-Profit Organizations to the Care of Children and their Families: A Case Study

(2008年3月31日受理)

福 知栄子      梅野 潤子\*  
Chieko Fuku      Junko Umeno

**Key words** : 子どもの育ち, 子どものニーズ, 地域, ボランティア, ネットワーク, 協働

### 要 旨

地域において、子どものソーシャル・ネットワークを作る支援活動が広がってきている。本稿では、NPO法人子育て支援の会「サポートあい」の実践事例を分析することにより、子どもの育ちの地域支援を組み立てる際のポイントを探るとともに、サポートあいの現在の地域への貢献と今後の課題を明らかにしたい。活動形成のプロセス分析においては、地域のボランティアとスーパーバイザーが協力し、子どものニーズに沿って柔軟な支援を開発し、地域のネットワークを丁寧に広げていったことが明らかとなった。また、現在の貢献としては、子どもを中心に、地域の様々な人々が集う「地域子どもサロン」として機能していること、一連の子ども支援において、予防的実践から機関協働実践までの広範囲な役割を果たしていることを把握できた。今後の課題としては、サポートあいが発見したより深刻な状況にある子どもの育ちを支えるため、地域の子どもに関わる専門職、とりわけ児童ソーシャルワーカーが効果的支援を実践する力量を高めること、地域の先駆的实践を公的支援として組み立てていくことが浮かび上がった。

### はじめに

地域において、子どもと親の様々な支援活動が広がってきている。子どもの育ちに心を寄せる親・家族や地域住民、専門職によって取り組まれるこれらの活動は、子どものソーシャル・ネットワークを作っていく活動であるといえる。子どもにとって最もよい結果をもたらす支援を組み立てるためには、目に見えにくい地道な仕事を意識化し、子どもにとっての意味合いを一つひとつ確認していきながら、取り組むことが欠かせない。そこで、本稿では、地域住民による子どもと親の支援グループであるNPO法人子育て支援の会「サポートあい」に注目し、その活動形成のプロセスを分析することにより、子どもの育ちを支える活動を作り上げる際のポイントを確認したい。さらに、サポートあいの実践を一連の子ども支援の

中に位置付け、現在の貢献と今後の課題を明らかにする。

研究方法としては、サポートあい理事長S氏およびN相談員の2名に対し平成20年3月に実施したインタビュー調査、岡山県社会福祉協議会の子育て支援に関する各委員会<sup>1)</sup>における意見交換および事例検討、各地域での子育て支援に関するセミナーでの発表事例<sup>2)</sup>をもとに、サポートあいの活動形成プロセスと現在の支援活動の事例分析を行なう。

研究対象であるサポートあいは、岡山県北部の山間部に位置する人口約52,000人のM市内にあるO町（人口約16,000人）を拠点に活動する、子育て支援グループである。活動を担うスタッフは現在9名であり、町内の認定こども園内に活動拠点を置き、毎日約15組程度の子どもと親が集うスペースにおいて、多様な支援活動を実践している。

## 1. サポートあいの活動形成プロセス

サポートあいの活動形成プロセスを、アセスメント、支援計画の策定、支援の実施第1期～第3期に分け、そ

れぞれの時期に起きた出来事を表－1のように示した。まず、このプロセスに沿い、資源マップを用いながら、サポートあいがどのように実践を積み重ねていったのかを分析する。

表－1 サポートあいの沿革

プロセス	年	サポートあいの主な出来事
アセスメント	平成12年	・N相談員と8人の主婦が協力し、コア・グループ結成 ・支援の方向性について話し合い
支援計画の策定		・役場、社会福祉協議会などへの協力要請を交渉 ・活動場所として、公民館の幼児室を借りることを取り付ける ・サロン活動と一時預かりの実施を計画
支援の実施第1期	平成13年 平成14年	・子育てボランティア「サポートあい」設立 ・公民館の幼児室にて、週1回のサロン活動と一時預かりを開始 ・N相談員が、O県社会福祉協議会「在宅福祉開発推進委員会」に参加 ・O町の「村おこし事業」の助成を受ける ・グループでの一時預かりを開始 ・O県社会福祉協議会より、「赤い羽根共同募金助成事業」に認められ、3ヵ年で子育てサポーター養成講座を実施
支援の実施第2期	平成15年 平成16年	・活動場所を地域の医療法人所有の一戸建て住宅に移転 ・独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金事業」の助成を受ける ・サロン活動の回数の増加（週1回→週2回→週3回） ・夏休みの学童一時預かりを開始 ・地方振興局からの視察を受ける ・不登校の子どもの受け入れを開始 ・S氏が、O県社会福祉協議会「ふれあい・子育てサロン推進委員会」に参加
支援の実施第3期	平成17年 平成18年 平成19年	・NPO法人格を取得 ・「M地区夢づくり推進賞」受賞 ・理事長S氏が、O県社会福祉協議会「地域における子育て支援ケア体制検討委員会」に委員として参加。地域子育て支援セミナーで事例発表 ・活動場所をO町認定こども園敷地内に移転 ・「地域における子育て支援ケア体制検討委員会」において事例研究を行いながら、保健師等と機関協働実践をする ・新スタッフ1名加入

### (1) アセスメント

O町教育委員会の家庭教育相談員、中学校の心の教室相談員であるN相談員は、不登校の子どもやひとり親家族の子どもなど、不安定な育つ子どもたちに心を砕き、支援に奔走していた。保育園長としての長年の実践経験から、地域での子どもの育ちの支援の必要性を強く感じていた。子どもと親と地域の人々が一緒に子どものことを語り合い、ともに子育てをすることができるような活動をしたいと考え、保育園長時代に出会っていた保護者たちに声をかけた。この呼びかけに、子育て経験者と子育て中の主婦8人が応え、平成12年2月頃から活動に向けての話し合いが始まった。祖母世代のN相談員と、先

輩親である8人の主婦が協力体制を組み、支援活動のコア・グループが結成された。

O町は県外から若い世代の転入が多いが、高齢化が進み地域の子どものための資源は少ないという地域特性があり、コア・グループメンバーの中にも、県外から転入し子育てに苦労した経験のある母親もいた。他のメンバーも、子育てにあたって、「子どもの友達がほしい」「親の不安やストレスを和らげる場所がほしい」と感じた経験をもっていた。議論から浮かび上がった地域の子どもと親の暮らしの現状は、少子化・核家族化などの影響から、子どもも親も友達がいない、親に代わって子どもを世話してくれる人がいない、というものであった。自分

達の子育て経験をもとに、これから育つ子どもや子育てする親が、同じようにつらい思いをすることがないように、地域の子どもと親のための支援活動を開始することが決定した。

〇町の地域特性を踏まえ、①子どもと親がリラックスできる場の提供と、②実際的な子どものケアの提供を実施することが必要であると判断し、結論として、恒常的に子どもと親が集うことのできる場所を地域に作るという、支援の方向性を打ち出した。このアセスメント・プロセスを図1-1に示した。

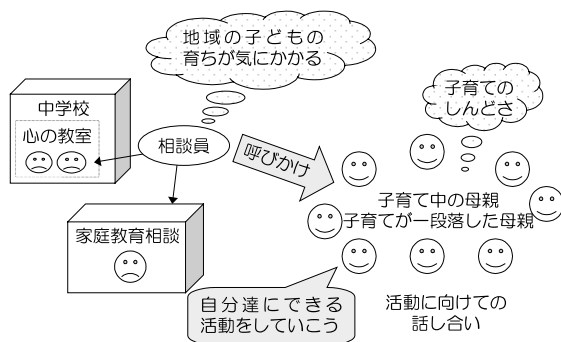


図1-1 アセスメント

## (2) 支援計画の策定

次にメンバーは、アセスメントの段階で導き出した支援の方向性をもとに、支援計画を策定した。支援目標は、地域の子どもが安定して育つことであり、支援目的は①子どもと親がリラックスできる場の提供と、②実際的な子どものケアの提供であった。それを達成するための具体的な支援課題は、①子育てサロンの実施と、②子どもの一時預かりの実施とした。

活動を始めるためには、支援課題が達成可能となるような活動の担い手、活動場所、活動内容、資金、必要物品が必要とされた。活動の担い手については、N相談員を中心に、地域の子どもの育ちに心を寄せているメンバーが既に集まっていた。活動内容については、メンバー全員が子育て経験者であることに加え、元保育士であるメンバーも複数おり、子どもの世話やグループ活動についてのノウハウは持ち備えていた。そのため、検討が必要であったのは、活動場所、資金、必要物品であった。

活動場所と活動資金については、子どもの地域福祉活動にあたることを考え、N相談員は〇町社会福祉協議会に相談した。しかし、当時は県下でも子育て支援活動に着手

し始めたばかりの時期であり、「高齢者福祉で手一杯、子育てのことまではできない」と協力が得られなかった。また、役場や議員にも活動への協力を要請したものの、現代家族の子育てのしんどさへ理解が充分得られず、「子育ては家庭でするもの」「なぜ子育てに税金を使わねばならないのか」との対応であり、支援を得るのは容易ではなかった。この交渉の中で、グループメンバーと地域の関係機関との子育て観のギャップが明らかとなった。

しかし、このグループには、「地域の子どもの安定した育ちを守る」という確固たる活動目的があったため、簡単には諦めなかった。活動場所の可能性をさらに探ったところ、地域の公民館に、幼児室という子ども用のスペースを発見した。ところが実質は、文化財の保管場所として利用され、地域の子どものために使われていないことが分かった。この幼児室を本来の目的に添って使用するために、N相談員は役場の担当者と粘り強く交渉を重ね、結果としてこのスペースを借りることができるようになった。地域の眠っていた資源を掘り当て、子どものための活動に活かすことにつながったといえる。

活動場所の確保はできたものの、活動資金と必要物品については課題が残されたままになった。しかしながら、行政や社会福祉協議会からの理解が得られないのであれば、まず自分達のできることから着手しようと、資金ゼロの状態からグループのメンバーのボランティア活動により、活動を開始することを決定した。必要物品についても、当面はメンバーの自宅から持ち寄ることとした。サロンの開催頻度は、メンバーに無理なく継続できるよう、週1回の開催とした。支援計画の策定プロセスは、図1-2に示した。

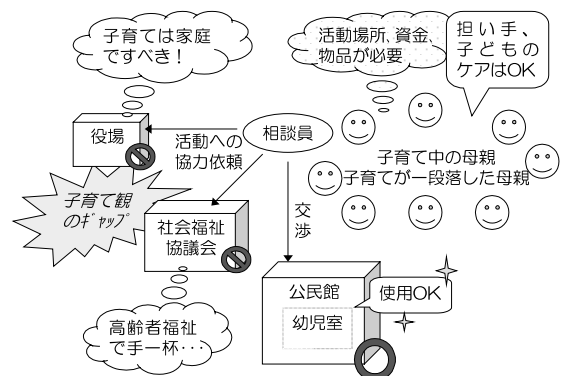


図1-2 支援計画の策定



サポートあいの主催でこれを実施した。そのときどきの力量に応じ、状況をよく考慮しながら段階的に自分達のできる仕事を引き受けて前進していることが見えてくる。また、N相談員がO県社会福祉協議会の在宅福祉推進委員会に参加するようになったことから、O県社会福祉協議会とのつながりができ、次第にサポートあいの活動は全県下に知られるようになる。一方で自らの暮らす地域において着実に子育てへの理解を広め、サポーターを増やしつつ、O県全域に渡り地域の子育て力を高めるために実践からの学びを伝える役割の重要性を認知し始めた時期である。この段階の状況を、図1-5に示した。

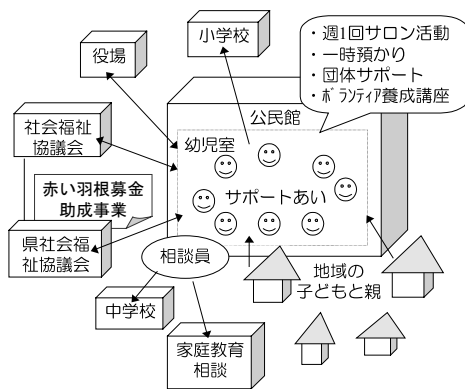


図1-5 支援計画の見直し

## ② 第2期

サポートあいへの親と子の参加者が増えるにつれ会場が手狭になってきたこと、幼児室が公民館の2階にあるため安全性への懸念があったことから、活動拠点を移転する必要性が高まった。そこでスタッフは、子どもにとってよりよい場所を、地域の中で再び探した。スタッフの1人が地域に空き家となっている一戸建て住宅があることを知り、持ち主である医療法人へ提供をお願いしたところ、無償での提供が決定し、平成15年4月より一戸建て住宅へ移転する。ようやくサポートあい専用の活動場所を得、参加者、スタッフ、ボランティアともにゆったりと落ち着いて活動できるようになる。

活動場所の移転に伴い、水・金曜の週2回にサロン活動の回数を増やしたものの、それでも足りないという参加者の声により、月・水・金曜の週3回の実施とした。子どもと親のニーズに即し、活動状況をみながら、段階的に無理なく活動回数を増やしていった。サロン活動の回

数増加による住宅維持費については、役場から助成金により、活動継続が可能となった。また、一戸建て住宅への移転後、町内の人が庭の手入れを手伝ってくれるなど、徐々に地域住民にも受け入れられていった。ここに、地域住民の生活の音が聞こえるまさにその場所で、子育て支援活動を展開することの重要性が見えてくる。地域において、近隣の目に触れる距離での活動は、直接的な子どもの世話への協力に加え、さまざまな形で活動への協力へと広がっていった。

また、専用の活動場所を得たことをきっかけに、新たな活動への取り組みも始まった。サポートあいの利用者から、「夏休みの子どもの世話が困る」というニーズが聞かれるようになり、7月から夏休み学童の一時預かりを毎日実施する。O町には学童保育がなかったため、サポートあいのスタッフが学童保育を兼ねるようになった。さらに、不登校の子どもを生徒ボランティアとして受け入れる取り組みを始めた。N相談員が、引きこもり状態の不登校の中学生をサポートあいへ誘ったことがきっかけである。生徒ボランティアは、乳幼児から慕われ、子どもの世話をしたりイベントの手伝いをしたりして過ごした。学校以外に地域で過ごす場所の少ない思春期の子どもにとっても、サポートあいは地域の人と時間を過ごすことのできる貴重な場の一つとなった。図1-6は、一戸建て住宅を中心とした地域との協力の様子を示している。

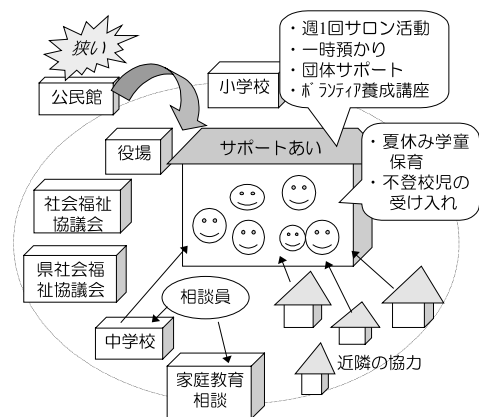


図1-6 支援の実施 第2期

## ③ 第3期

以前にも増して、様々な市町村から視察を受け入れ、

また講演会やセミナーなどへ出向き実践を伝える活動を行なっていた。スタッフが対外的な活動もし始め、日々の実践の一方で、他の地域への貢献の機会も増えてきた。地道に子どもと親の支援を積み重ね、地域の子育て力を強化していった活動が認められ、O県の「M地区夢づくり推進賞」を受賞するなど、実績が評価されていった。支援活動が充実するにつれ、スタッフのボランティア活動に限界が見えてきたこと、「M地区夢づくり推進賞」受賞をきっかけに地方振興局職員から勧められたことなどから、平成17年度より、NPO法人として新たなスタートを切った。事務的業務が増え、主婦だけでは困難な仕事であったが、果敢に挑戦し、各種助成金をつなぎながら活動を継続している。

NPOとなってから、大きな動きがあった。平成19年5月からは、活動拠点をO町に新たにできた認定こども園敷地内へ移転した。大きな窓のついた壁を隔てた向こう側には、認定こども園の子ども達が日中生活している。平日は毎日開放し、子どもと親が15組程度集まっている。サロン活動においては、個別的に子どものこと、親自身のことについてスタッフに相談をする親もいる。スタッフだけで対応できないケースについては、O県社会福祉協議会「地域における子育て支援ケア体制検討委員会」での事例研究と並行しながら、N相談員や保健師につなぎ、地域を巻き込みながら個別的に支援している。また、サポートあいの活動の新たな担い手も育成している。参加者の中から、次の世代の支援者を育成することも視野に入れ活動しており、サポートあい設立時からのスタッフ8名に加え、新たに子育て中の母親1名をスタッフとして招き入れた。実践が世代を超えて継続されるよう、努力がなされている。地域においては、これまでサポートあいのスタッフが担っていた学童保育活動が、正式な学童保育の設立につながり、現在では専任のスタッフによって子どもの世話が提供され、行政の補助を受けながら地域の親が運営している。地域のニーズのすべてを引き受けてしまうことなく、他の人々が担える部分は任せる。このことが、地域全体としての子育て力の強化につながってく。活動拠点が二箇所が増えた、支援の実施第3期の状況を、図1-7に示した。

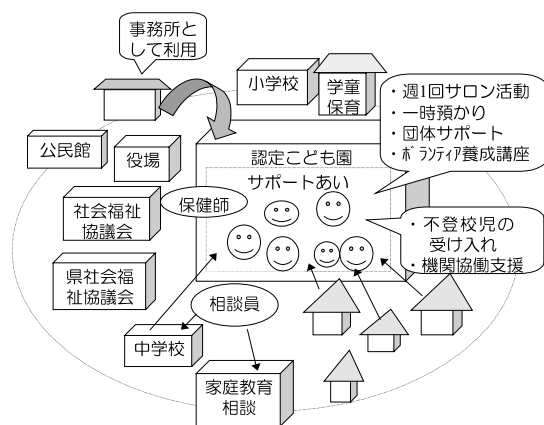


図1-7 支援の実施 第3期

#### （4）活動の評価－活動形成プロセスからの学び－

これまでみてきたように、サポートあいの活動は、地域の主婦が自らの子育てに苦労した経験をもとにして、住民主体で支援活動を展開している。このグループの強みの一つは、地域で子どもの育ちを支えてきた、N相談員という経験豊かなスーパーバイザーの存在である。地域の子どもや親の立場に立つボランティアがその力を十分に発揮できるよう、関係機関とのコーディネートや活動のアドバイスなど、側面から活動を支えるキーパーソンがいたことも、この活動が広がっていったことの秘訣であるといえる。

また、サポートあいがグループ内にとどまらず、地域に根を下ろし、多くの人々を巻き込みながら柔軟な支援を組み立て、さらに子どもの暮らしの安定のためのネットを丁寧につないでいったことも興味深い。フェイス・トゥー・フェイスの関係を大切にし、子どもと家族のニーズに柔軟に対応し、一つひとつサービスを開発してきた。そして、協力者を一人、また一人と増やす努力が、結果として地域の子育て力を強化し、子どものニーズが満たされる地域へと耕されていった。まさに、子どものソーシャル・ネットワークが拡大していくプロセスが、支援マップ（図1-1から図1-7）からも見てとれる。

さらには、活動の継続性にも注目しておきたい。サポートあいでは、設立当初のスタッフが7年間継続して活動している。活動を進めるにあたっては常に順風満帆ではなかったが、一人も辞めることなく、今日までスタッフが力を出し合いながら丁寧な実践を積み重ねている。子どもの最善の利益を守るといふ、揺るがない共通目標を

持ち、児童福祉の理念を十分理解した人々だからこそ可能となったと思われる。これまで活動が継続されてきただけでなく、未来に向かって活動が途絶えることのないよう、サポートあいでは現在も次世代の支援者の育成に力を注いでいる現状にある。

## 2. サポートあいの多様な支援活動

ここでは、平成20年3月現在の、サポートあいの支援内容を紹介する。サポートあいの支援活動は、子どもと親への直接支援についてみると、活動拠点内での支援と活動拠点外での支援があり、さらにグループ支援と個別支援に分けられる。一方で、地域への支援については、近隣での支援としてスタッフの養成や地域での子育て支援ボランティア養成講座を実施し、県下全域への支援として各種研究会参加やセミナーにおける事例紹介を行っている。

### (1) 子どもと親への直接支援

サポートあいが行なう、子どもと親への直接支援について、表2-1のように整理した。それぞれの支援活動の現状について、以下に概略する。

表2-1 子どもと親への直接支援

	グループ支援	個別支援
拠 点 内 での支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育てサロン</li> <li>・季節行事</li> <li>・若ママの会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一時預かり</li> <li>・悩み相談</li> <li>・不登校の子どもの受け入れ、青年期の居場所</li> </ul>
拠 点 外 での支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一時預かり</li> <li>・出張イベント</li> <li>・子ども向け・大人向けイベント</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出前保育</li> </ul>

#### ① 活動拠点内での支援

##### ・グループ支援

子育てサロンでは、就学前の子どもと子育てしている人が集うことができるよう、平日の10時～16時の間、サポートあいを開放している。毎日スタッフが1人以上常駐し、毎週水曜日の午前中は、スタッフによる手作りおやつが振舞われ、紙芝居、絵本、パネルシアターなども行なう。参加者は多様であり、遠方から転居してきた

家族、双子の子ども、妊娠中の母親、外国人の父親など、非常に多様な子どもと家族が参加している。また、季節行事も企画し、伝承行事を参加者みんなで楽しんでいる。季節行事については、家庭における子どもへの文化伝承が難しくなっている状況を反映し、若い親からのニーズが多い。行事の際には、食のボランティアや大学生ボランティアなどの協力を得ながら活動する。若ママの会とは、10代～20代前半の若い母親がサポートあい気軽に参加できるよう、また、県外から転居してきた人が子育ての悩みを話せるように設けた、フォーラムの場である。保健師やスタッフを囲み、交流したり学習したりできる場を設定している。

##### ・個別支援

一時預かり（個人サポート）は、「おねがい会員」である親・家族が、急病や通院などにより一時的に子どもの世話が困難な場合、ボランティアである「まかせて会員」が子どもをサポートあいでも預かって世話をする支援活動である。原則は、1歳から就学前の子どもが対象だが、状況によっては相談に応じ検討することとしている。専属スタッフがおねがい会員とまかせて会員をコーディネートし、事前打ち合わせを充分行なった上で実施する。個人サポートは、非常に幼い子どもの世話の依頼が増えており、首がすわっていない乳児を預けたいという依頼もある。全体として依頼数が増えており、子どもにとって、親以外に世話をしてくれる人があまりに少ない状況を浮き彫りにしている。また、子育ての悩み相談にも応じており、より個別的支援が必要な場合には、保健師や相談員と連携をとり支援にあたっている。さらに、サポートあいに来る子どもは、乳幼児だけではない。学校へ行くのは難しいが、サポートあいであれば来ることができる不登校の子どもを、ボランティアとして受け入れている。ボランティア活動の内容は、子どもの世話や行事の手伝いなどである。これは親同士の口コミから自然に始まったものであり、子どもがボランティア活動をするのが難しい場合には、家庭と学校の間にある居場所として利用することも可能である。さらには、学齢期の子どものみならず、家庭にひきこもりがちである青年も受け入れられている。

#### ② サポートあいの活動拠点外での支援

##### ・グループ支援

一時預かり（集団サポート）として、講演会、研修会、学校行事、団体活動、学校参観日などの際、依頼に応じてスタッフ1名以上とまかせて会員が出向き、集団で子どもの世話をしている。また、依頼に応じ、平成16年度にサポートあいのスタッフ3名で結成した「オレンジ・マーマレード」というグループが地域に出かけ、絵本の読み聞かせ、パネルシアター、手遊びなどを行なう出張イベントもある。さらに、子ども向け大人向けイベントとして、親子で楽しめる人形劇、ミュージカルなどを企画したり、子育て中の親へコンサートなども実施したりしている。

#### ・個別支援

相談内容により、個別の出張保育をする場合がある。

### （２） 地域への支援

サポートあいが行なう地域への支援は、表2-2のとおりである。

表2-2 地域への支援

近隣への支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サポートあいのスタッフの資質向上</li> <li>・サポートあいの新スタッフの養成</li> <li>・まかせて会員の養成および資質向上</li> </ul>
県下全域への支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他市町村の子育てボランティア養成講座への講師としての参加</li> <li>・〇県社会福祉協議会「地域における子育て支援ケア体制検討委員会」への委員としての参加</li> <li>・児童福祉専門職の研修会「児童ソーシャルワーク研究会」に参加</li> </ul>

#### ① 近隣への支援

サポートあいのスタッフの資質向上として、スタッフは継続して各種研修に参加している。また、次世代のスタッフ養成にも着手し始めている。平成19年度からは、サポートあいに参加している母親に声をかけ、新たなスタッフとして受け入れている。さらに、サポートあいのボランティアであるまかせて会員の養成講座を実施し、継続研修も行なっている。サポートあいの豊かな実践を下支えする人々の支援力を強化し、さらに新たな担い手も育てることで着実に協力者を増やす活動を継続している。

#### ② 県下全域への支援

〇町内のみならず、サポートあいはいは県下全域に自らの

実践を伝え、〇県全体として子どもの育ちを支える力を高めるために、他の地域の支援者と協力している。具体的には、他の市町村の子育てサポーター養成講座において講師を務め、実践内容を伝え、〇県社会福祉協議会の「地域における子育て支援ケア体制検討委員会」、児童福祉専門職の研修会である「児童ソーシャルワーク研究会」において市町村を越えて実践を共有したり、よりよい支援方法について検討を重ねたりしている。

## 3. 地域におけるサポートあいの意味合い

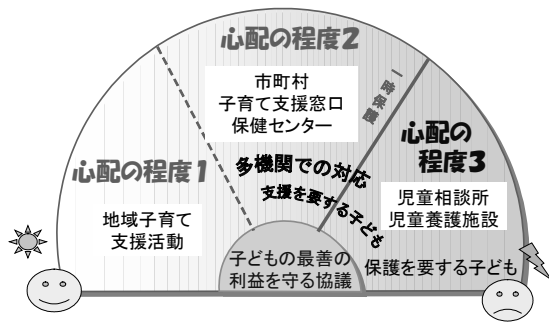
### （１） 地域子どもサロンとして

これまでみてきたように、サポートあいには非常に多様性に富んだ支援内容を有している。これらは一朝一夕に組み立てられたのではなく、子どもと親のニーズに敏感なスタッフにより、地域の実情に合わせて一つひとつ柔軟に作り上げられてきた。実際に、サポートあいの支援により、様々な状況にある子どものニーズが満たされている。乳幼児期のみならず、学齢期、青年期を含めた子どもの発達を理解し、子ども中心の視点を持ったスタッフの支援力の高さがうかがえる。さらに、中心となるスタッフに加え、地域の様々なスキルを持った人々がボランティアとして参加している。重要な点は、サポートあいボランティアを丁寧な育てる段階から始め、継続して活動できるように支援していることである。また、相談員や保健師も立ち寄り、必要があれば個別的な支援を受けることも可能である。このように、サポートあいには「すべての子ども、様々なライフステージいる親、様々な世代のボランティアがやってくる子どもの場所」<sup>3)</sup>である「地域子どもサロン」の機能を有しているといえる。

### （２） 一連の支援における位置付け

ここでは、サポートあいの支援活動の、地域における位置付けを明らかにしたい。一連の子ども支援活動を示すために、Revised child concern model<sup>4)</sup>を参考にわれわれが開発した「子どものことが心配モデル」(図3)を用いて考察する。





Lynne Jones and Tom O'Loughlin "Revised child concern model"をもとに参考資料として作成。  
福知栄子・梅野潤子(2008)

図3 子どものことが心配モデル

このモデルは、子どもの健やかな育ちへの「心配の程度」を三段階に分け、それに対する一連の支援活動を位置付け、図示したものである。子どもの暮らしが不安定になり、徐々に心配の程度が増すこともあれば、急激に「心配の程度3」にまで及ぶこともある。どのような子どもへの心配の現れ方であれ、重要なことは、この心配の程度をより低次に抑え、子どもの暮らしが安定する方向に戻す支援活動である。心配の程度1の段階では、地域子育て支援活動が子どものニーズを満たす支援を行い、そのことで子どもの暮らしが安定するレベルの状況にあたる。それでも子どものニーズが満たされない場合には、さらに市町村の子育て支援課、保健センターなど地域の専門職も加わり、多機関での対応がスタートする。ここで子どものニーズが満たされれば、心配の程度は2から1へと戻っていく。現実が常にそうとは限らないが、地域の専門職が関与し懸命な支援が実施されたにもかかわらず、残念なことに、なおかつ子どものニーズが満たされない状況がある場合には、心配の程度は3に向かう。この段階では、子どもは地域を離れ、一時的に親とは別の暮らしをすることになる。児童相談所が介入し、一時保護がなされる、あるいは児童養護施設で短期間暮らす間、子どもの暮らしの安定に向けた支援が実施される。専門職や地域の関係者の努力により、地域での子どもの暮らしが安心であるということが確認されれば、段階的に心配の程度が下がっていく。この考え方の根幹にあるものは、子どもの最善の利益であり、その実現のため、すべての段階で子どもと親、および関係者での協議がなされる必要があるとしている。

サポートあいをこのモデルに位置付けるとすれば、基本的には心配の程度1にあたる子どもへの支援活動を行っているといえる。具体的には、これまでみてきたような子育てサロン活動や一時預かりなどが挙げられる。さらに、日々の支援の中から、より深刻なニーズのある子どもと家族に出会った場合には、保健師や市町村の相談員など他機関と協働しながら、心配の程度2にあたる子どもにまで支援を提供している。地域の専門職と協働し、地域において子どもの育ちを支え、心配の程度3にまで振れるのを防止しているといえる。地域のNPOでありながら、支援の守備範囲を広く持ち、子ども一人ひとりの状況に応じて支援を組み立てることのできる、地域の子どもと親にとって大変頼もしい存在であることが分かる。

## 4. 今後の課題

### (1) より複雑な支援ニーズへの対応

グループ支援としてのサロン活動の中から、より深刻なケースが見えてくることがある。サロン活動中に、スタッフに個人的に相談し、子育てや自身の悩みを訴えてくる親もいる。サポートあいでは、スタッフのみで対応できないと判断したときには、相談員、保健師につなぎ、機関協働実践に取り組み始めている。たとえば、外国人の親、不登校の子ども、障害のある子どもなどのケースである。こうしたより深刻な状況の子どもと親への支援にあたって、スタッフが特に課題と感じているのが、子どものニーズを満たす親の養育支援である。誰も自分を助けてくれない、子どもの育て方を教えてくれないという状況の中で、地域の親はサポートあい相談に来る。地域の親から信頼されているスタッフには、適切に子どものニーズを満たせない親自身の育ちのしんどさが見えてくる。スタッフはこうした親に対し、具体的な生活場面で、何をすることが子どものニーズを満たすことになるのかを伝えることができる。スタッフは日々の活動の中で親の支援ニーズに気づき、その一部については対応できるかもしれない。しかしながら、精神的に治療を必要とする場合やネグレクトが懸念される場合などにおいては、その支援ニーズを満たす専門的支援を誰が担うのが不明確であり、スタッフが過重な役割を担わざるを

得ないのが現状である。

## (2) 子どものニーズを満たすために

子どもが育つ上で、地域がいかに重要であるかを、サポートあいの活動は教えてくれる。サポートあいの活動は地域の安全ネットとなっており、困難な状況にあっても、子どもの暮らしの安定が守られている。一方で、地域だけでは子どものニーズを満たせない困難なケースも浮き彫りになってきた。子どもと親の近くで心を砕き、実際に支援も提供している地域の強さを活かし、さらに各専門機関のもつ機能を発揮し、包括的に支援を組み立てるソーシャルワークが求められているといえる。具体的には、児童ソーシャルワークを担当する児童相談所、市町村子育て支援課は、地域において子ども支援の核となっているサポートあいのような支援者を、要保護児童地域対策協議会などの子ども支援システムに明確に位置付け、支援のパートナーとして協力する実践を要請されている。これが実現可能となるような、児童ソーシャルワーカー一人ひとりの支援力が厳しく問われているといえる。また、地域の実践から見えてきた課題を、公的な支援としてどう開発していくかという、政策面での課題も挙げられる。たとえば、親の養育支援や、思春期・青年期の子どもの支援などに各専門職がどう取り組んでいくか、開拓的な地域の実践から学び、公式な支援の仕組みを構築していくことが切に望まれる。

## お わ り に

子どもにとって豊かな時間を過ごすことのできるセンターであり、地域全体を耕し、ソーシャル・ネットワークを作ってくれる存在として、サポートあいの活動をみてきた。子どもの健やかな育ちを願い、親身になって世話をしてくれる人々から大事にされることで、子どもたちは満たされた児童期を送ることができ、自立した大人へと一步一步育ちのあゆみを進めることができる。私達は、サポートあいをはじめとした子ども育ちに関わる実践から、地域の支援力の高まりを、知ることができる。今後は、この地域支援を基盤として、子どもに関わる各専門職がいかにそれぞれの固有性を発揮できるかが勝負であると思われる。地域におけるすべての子どものニ

ズを満たすため、専門職がより支援力を強化し、重層的支援を構築していくことが望まれている。

最後に、子どもの育ちを支える貴重な実践について教えてくださり、多くの学びの機会を提供して下さったサポートあいのみなさまに、心から感謝申し上げます。

## 注

- 1) 在宅福祉開発推進委員会（平成13年度～平成14年度）、ふれあい・子育てサロン推進委員会（平成14年度～平成17年度）、地域における子育て支援ケア体制検討委員会（平成18年度～平成19年度）
- 2) 「平成17年度地域子育てシンポジウム」（岡山県社会福祉協議会 ふれあい・子育てサロン推進委員会主催、平成17年度）、「Let's start 地域子育て支援講座」（真庭市社会福祉協議会・岡山県社会福祉協議会主催、平成17年度）、「地域でがんばろう！子育て支援講座」（美作市社会福祉協議会・岡山県社会福祉協議会主催、平成18年度）
- 3) 福知栄子：「子どもの育ちと家族援助」，高菅出版（2006）p. 82－84.
- 4) Lynne Jones, Tom O'Loughlin: 'A Child Concern Model to Embrace Framework' Martin C. Calder and Simon Hackett: "Assessment in Child Care: Using and Developing Framework for Practice", Russell House Publishing (2003)

## 参 考 文 献

- 1) 中野敏子，福知栄子，瀧澤久美子，森山千佳子：「どう活かすあなたの支援 基本のキ」，大揚社（2005）
- 2) 福知栄子：「子どもの育ちと家族援助」，高菅出版（2006）
- 3) 福知栄子：「地域子育て支援におけるファミリーサポートセンターのコーディネート機能に関する研究」，平成15年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書（2005）
- 4) 横堀哲夫，横堀三千代：「家に帰る 横堀ホームの十年」，（1992）

- 5) 岡山県社会福祉協議会 在宅福祉開発推進委員会：  
「平成13年度地域における子育て支援について（中間まとめ）」（2002）
- 6) 岡山県社会福祉協議会 在宅福祉開発推進委員会：  
「平成14年度地域における子育て支援について（報告書）」（2003）
- 7) 岡山県社会福祉協議会 ふれあい・子育てサロン推進委員会：「平成15年度ふれあい・子育てサロン推進委員会実施報告書」（2004）
- 8) 岡山県社会福祉協議会：「平成18年度地域の子育て支援サポーター養成講座報告書」（2007）

